4　発生予察情報の発表

(1) 警報　発表なし

(2) 注意報

番号	発表月日	対象作物 対象病害虫	情報内容
第1号	4月10日	果樹類 クワゴマダラヒトリ	1．発生地域（対象地域）　県下全域 2．発生程度　　多 3．注意報発令の根拠 (1) 4月上旬の巡回調査の結果、諫早市多良見町、大村市、長与町のかんきつ園と時津町のぶどう園内の雑草で発生が認められ（写真1）、一部圃場で多発生していた。なお、近年この時期の巡回調査では発生はほとんど認められない。 (2) 昨年10月上旬の巡回調査の結果、本虫の発生源となるアカメガシワやカラスザンショウで幼虫巣が近年では最も多く見られた。ただし、昭和40年代後半に大発生したときよりも明らかに少ない発生である。 (3) 病害虫防除員によると西海市大瀬戸町及び諫早市多良見町のかんきつ園、大村市のかんきつ園となし園で本虫の発生が多い。 4．防除法等 (1) 果樹園で発生すると新梢や花蕾に大きな被害を及ぼすことがあるので、園地をこまめに見回り早期発見に努める。 (2) 果樹園周辺にアカメガシワ、カラスザンショウ、桑などの産卵樹が多いと被害を受けやすい。 (3) 果樹園内や周辺の除草を行い、果樹園への侵入を防ぐ。ただし、すでに園内に侵入している園で除草を行うと、樹上に移動し新梢の被害が拡大する場合があるので注意する。 (4) 発生を認めた園では薬剤による防除を行う。ただし、圃場周辺から5月中旬頃まで継続的に侵入してくる場合があるので残効の長い薬剤を使用する。また、かんきつ以外では本虫に対する登録薬剤はない。 写真1　かんきつ園雑草に生息するクワゴマダラヒトリ老齢幼虫
第2号	4月14日	麦類 赤かび病	1．発生地域（対象地域）　県下全域 2．発生時期　　4月下旬以降 3．発生程度　　多 4．注意報発令の根拠 (1) 麦類の出穂期以降断続的に降雨があり、本病の発生に好適な条件が続いている。 (2) 福岡管区気象台発表の4月14日付けの気象予報によると向こう1か月の気温は平年並か高い見込みであり、本病の発生が多くなることが予想される。 5．防除法等 (1) 薬剤散布は防除適期である開花最盛期（出穂の概ね7日後）、二条大麦の場合は穂揃い期に行う。1回目の防除から7～10日後に2回目の防除を行うと防除効果が高まる。 (2) 既に防除適期を迎えた圃場で薬剤散布を行っていない場合は早急に防除を行う。 (3) 薬剤散布にあたっては使用基準を遵守する。なお、本病防除の主要薬剤であるチオファネートメチル剤は昨年登録内容が変更され、使用

<table>
<tr><th>番号</th><th>発表月日</th><th>対象作物
対象病害虫</th><th>情報内容</th></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>
時期及び使用回数が表2のとおりとなったので注意する。
表1　各品種の出穂期（総合農林試験場、諫早市）
<table>
<tr><th>品種名</th><th>出穂期（平年値）</th></tr>
<tr><td>ニシノチカラ</td><td>4月　3日（3月31日）</td></tr>
<tr><td>ニシノホシ</td><td>4月　3日（3月30日）</td></tr>
<tr><td>イチバンボシ</td><td>4月　3日（3月30日）</td></tr>
<tr><td>御島裸</td><td>4月12日（4月　7日）</td></tr>
<tr><td>チクゴイズミ</td><td>4月11日（4月　7日）</td></tr>
<tr><td>シロガネコムギ</td><td>4月11日（4月　7日）</td></tr>
</table>
注）平年値は H13～17 年の平均
表2　チオファネートメチル剤の使用時期と回数
<table>
<tr><th>薬剤名</th><th>作物名</th><th>使用時期</th><th>本剤の使用回数</th></tr>
<tr><td rowspan="2">トップジンM粉剤
トップジンM水和剤</td><td>小麦</td><td>収穫14日前まで</td><td rowspan="2">3回以内
（出穂期以降は1回以内）</td></tr>
<tr><td>麦類（小麦を除く）</td><td>収穫30日前まで</td></tr>
</table>
</td></tr>
<tr><td>第3号</td><td>4月14日</td><td>たまねぎ
べと病</td><td>
1．発生地域（対象地域）　県下全域
2．発生程度　多
3．注意報発令の根拠
（1）4月上旬の巡回調査（12筆）の結果、発病株率は1.8％（平年0.2％）、発生圃場率は41.7％（平年9.3％）で、一部多発地域が見られた。
（2）3月下旬から4月上旬にかけて断続的に降雨があり、発病に適した天候が続いている。
（3）福岡管区気象台発表の4月14日付けの気象予報によると向こう1か月の降水量は平年並の見込みであるが、今後の降雨により多発する恐れがある。

図1　べと病

図2　べと病菌分生子柄と分生子
4．防除法等
（1）発生初期の防除を徹底する。発生程度に応じて7～10日おきに（激発時4～5日おき）数回散布する（薬剤は県病害虫防除基準参照）。
（2）耐性菌が出現する恐れがあるので同一系統薬剤の連続使用を避ける。
（3）被害茎葉残渣は次作の発生源となるので圃場から持ち出し処分する。
（4）収穫時期が近づいているので、薬剤散布に際しては農薬の使用基準を遵守する。
</td></tr>
<tr><td>第4号</td><td>5月16日</td><td>ナシ
黒星病</td><td>
1．発生地域（対象地域）　県下全域
2．発生程度　多
3．注意報発令の根拠
（1）4月から5月上旬にかけて低温・多雨の傾向が続き、本病の発生に好適であった。
（2）5月上旬の巡回調査（12筆）の結果、発病葉率は0.6％（0.4％）、発生圃場率は41.7％（19.7％）、発病果率は0.3％（0.0％）、発生圃場率は33.3％（7.5％）で平年より発生が多い。
（3）一部圃場では、幼果で多発生している。
4．防除法等
</td></tr>
</table>

<table>
<tr><th>番号</th><th>発表月日</th><th>対象作物
対象病害虫</th><th>情報内容</th></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>(1) 本病に対してはＥＢＩ剤が防除効果が高い。ただし、薬剤の感受性低下を避けるため、連用を避け、年間の使用回数を極力3回以内に抑える。
(2) 発病葉や発病果は伝染源となるので圃場に放置せず園外に持ち出して処分する。

図1　果実の病徴

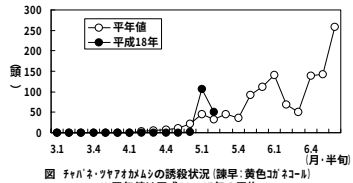
図2　葉の病徴</td></tr>
<tr><td>第5号</td><td>5月16日</td><td>果樹共通
カメムシ類</td><td>1．発生地域（対象地域）　県下全域
2．発生程度　多
3．注意報発令の根拠
(1) チャバネアオカメムシ成虫の越冬量は、過去10か年では、平成8年に次いで多く、ほぼ平成14年並であった。
(2) フェロモントラップでの誘殺量は、5月1半旬以降に増加している（図）。
(3) 病害虫防除員の報告によると、長与町、西海市西彼町、西海市西海町、諫早市、大村市、佐世保市、雲仙市瑞穂町、南島原市有家町のかんきつ園となし園で飛来が多く、果樹園への飛来は、県下全域に及んでいると考えられる。
(4) 5月上旬の巡回調査では、かんきつ園、なし園、びわ園において平年より多い圃場で寄生を認めた。
 

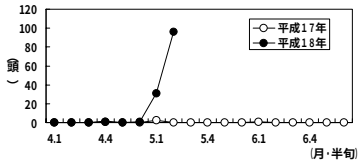
図 ﾁｬﾊﾞﾈ・ﾂﾔｱｵｶﾒﾑｼの誘殺状況（諫早：黄色ｺｶﾞﾈｺｰﾙ）
※平年値は平成11～17年の平均
 

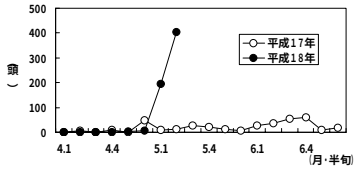
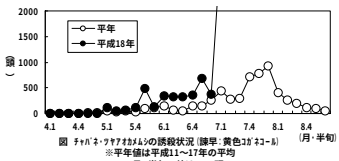
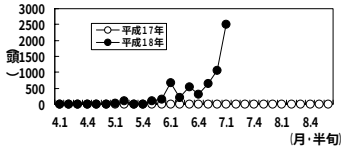
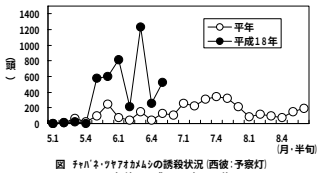
図 ﾁｬﾊﾞﾈ・ﾂﾔｱｵｶﾒﾑｼの誘殺状況（多良見：黄色ｺｶﾞﾈｺｰﾙ）
 

図 ﾁｬﾊﾞﾈ・ﾂﾔｱｵｶﾒﾑｼの誘殺状況（有家：黄色ｺｶﾞﾈｺｰﾙ）
4．防除対策
(1) 今後、8月上旬頃までは果樹園への飛来が多いと予測されるので、この期間は特に発生に注意する。
(2) 飛来時期や飛来量は園によって差があるので、園をなるべくこまめに見回り、早期発見、早期防除に努める。
(3) 他の害虫の防除を実施する際にカメムシ類に効果がある薬剤を選択する。
(4) カメムシ類は夜間に果樹園での密度が高まるので防除は夕方または早朝に行う。
(5) ハウス栽培では、開口部を防虫網（4mm 目以下）で被覆する。また既に被覆済のハウスでも防虫網の破損がないか点検し、カメムシ類</td></tr>
</table>

番号	発表月日	対象作物 対象病害虫	情報内容
			の侵入を防ぐようにする。 (6) なしでは袋かけ作業が遅れないように注意する。 (7) 今後の発生状況は予察情報や病害虫防除所ホームページに掲載する予定であるので防除の参考にする。
第6号	7月 7日	果樹共通 (かんきつ、なし、かき、キウイフルーツ等) カメムシ類	1．発生地域(対象地域)　県下全域 2．発生時期　7月上旬～8月上旬 3．発生程度　多 4．注意報発令の根拠 (1) チャバネアオカメムシ成虫の越冬量は、過去10か年では、平成8年に次いで多く、ほぼ平成14年並であった。 (2) フェロモントラップでのチャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシの誘殺量は、依然多い状況が続いており、7月1半旬に激増している地点がある(図)。 (3) 病害虫防除員の報告によると、西海町、佐世保市、大村市、瑞穂町等のかんきつ園で集中飛来している園が見られ、一部は落果が見られる。 (4) 過去の飛来状況から判断すると、今後8月上旬頃までは、果樹園への飛来は特に多いと考えられる。  図 チャバネ・ツヤアオカメムシの誘殺状況(諫早：黄色コガネコール) ※平年値は平成11～17年の平均 ※7月1半旬の値は3368頭  図 チャバネ・ツヤアオカメムシの誘殺状況(多良見：黄色コガネコール)  図 チャバネ・ツヤアオカメムシの誘殺状況(西彼：予察灯) ※平年値は平成9～17年の平均 5．防除対策 (1) 今後、8月上旬頃までは果樹園への飛来が多いと予測されるので、この期間は特に発生に注意し、園をなるべくこまめに見回り、早期発見、早期防除に努める。 (2) 他の害虫の防除を実施する際にカメムシ類に効果がある薬剤を選択する。 (3) 飛来期間が長期にわたるので、残効の長い合成ピレスロイド剤、ネオニコチノイド剤を使用する。 (4) カメムシ類は夜間に果樹園での密度が高まるので防除は夕方または早朝に行う。 (5) ハウス栽培では、開口部を防虫網(4mm目以下)で被覆する。また既に被覆済のハウスでも防虫網の破損がないか点検し、カメムシ類の侵入を防ぐようにする。 (6) 台風通過後には、果樹園に多飛来する場合があるので注意する。 (7) 本年のハダニ類の発生はこれまで少なく推移しているが、病害虫防除員の報告によるとカメムシ対策で合成ピレスロイド剤を散布した園でハダニ類の発生が多い園がある。今後も合成ピレスロイド剤を散布する機会が多くなることから、ハダニ類、カイガラムシ類の発生にも注意をする。 (8) 今後の発生状況は予察情報や病害虫防除所ホームページに掲載する予定であるので防除の参考にする。
第7号	7月28日	いちご 炭疽病	1．発生地域(対象地域)　県下全域 2．発生程度　多

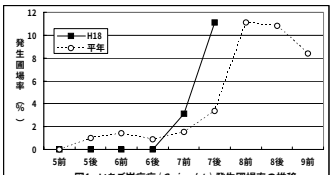
<table>
<tr><th>番号</th><th>発表月日</th><th>対象作物
対象病害虫</th><th>情報内容</th></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>
3．注意報発令の根拠
(1)7月下旬の巡回調査（27筆）の結果、*G.cingulata* による炭疽病は発生圃場率11.1%（平年3.4%）、発病株率0.2%（平年0.0%）であった。*C.acutatum* による炭疽病（俗称：葉枯炭疽病）は発生圃場率11.1%（平年9.8%）、発病株率0.2%（平年0.7%）であった。
(2)6月23日～7月5日、19日～24日にかけてまとまった降雨があり、病原菌の飛散、感染に好適であった。
(3)防除員の報告によると、7月中～下旬に発生が拡大し、一部多発圃場が見られた。
(4)今後、降雨や台風などの気象次第では発生が増加することが予想される。


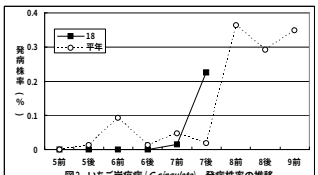
図1　いちご炭疽病（*G.cingulata*）発生圃場率の推移


図2　いちご炭疽病（*G.cingulata*）　発病株率の推移
4．防除対策
(1)育苗床が多湿にならないように、連続した長時間の潅水はしない。密植を避け、排水対策を確実に行う。
(2)発病した子苗およびその周辺の株は速やかに処分する。除去した発病株や茎葉は、圃場内やその周辺に放置しない。
(3)葉の展葉間隔にあわせて定期的に薬剤防除する。*C.acutatum* による炭疽病には、バイコラール水和剤は防除効果が低いので注意する。
</td></tr>
<tr><td>第8号</td><td>7月28日</td><td>普通期水稲
トビイロウンカ</td><td>
1．発生地域（対象地域）　県下全域
2．発生程度　多
3．注意報発令の根拠
（1）主要飛来波は6月25～27日、7月4～6日、7月21～23日に認められた。7月4～6日及び21～23日の飛来が多かった（表）。
(2)7月5～6半旬の巡回調査（94筆）の結果、普通期水稲における株当たり虫数は0.1頭（平年0.0頭、前年0.1頭）と多く（図1）、中・老齢幼虫が主体であった。県北部では株当たり虫数が1頭を超える圃場も認められた。発生圃場率は31.9%（平年8.9%、前年31.9%）で過去10か年で最も高く、前年並あった（図2）。
表　トビイロウンカの誘殺状況
<table>
<tr><th rowspan="2">月 日</th><th colspan="3">諫 早</th><th>島原</th><th>佐世保</th><th>岐宿</th></tr>
<tr><th>白色</th><th>青色</th><th>ﾈｯﾄ</th><th>白色</th><th>白色</th><th>白色</th></tr>
<tr><td>6.25</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>1</td><td>0</td></tr>
<tr><td>26</td><td>1</td><td>1</td><td>0</td><td>1</td><td>1</td><td>6</td></tr>
<tr><td>27</td><td>0</td><td>1</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td></tr>
<tr><td>28</td><td>1</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td></tr>
<tr><td>29</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td></tr>
<tr><td>30</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td></tr>
<tr><td>7.1</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>11</td></tr>
<tr><td>2</td><td>1</td><td>0</td><td>0</td><td>1</td><td>1</td><td>1</td></tr>
<tr><td>3</td><td>1</td><td>1</td><td>0</td><td>3</td><td>0</td><td>2</td></tr>
<tr><td>4</td><td>0</td><td>0</td><td>1</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td></tr>
<tr><td>5</td><td>47</td><td>24</td><td>0</td><td>12</td><td>25</td><td>19</td></tr>
<tr><td>6</td><td>11</td><td>10</td><td>0</td><td>19</td><td>1</td><td>5</td></tr>
<tr><td>7</td><td>9</td><td>5</td><td>0</td><td>4</td><td>0</td><td>0</td></tr>
<tr><td>8</td><td>1</td><td>2</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td></tr>
<tr><td>9</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td></tr>
<tr><td>10</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>1</td></tr>
</table>
</td></tr>
</table>

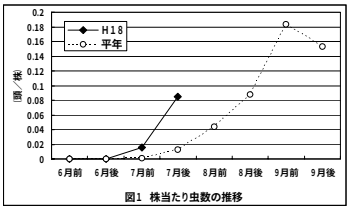
<table>
<tr><th>番号</th><th>発表月日</th><th>対象作物
対象病害虫</th><th>情報内容</th></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>
<table>
<tr><td>11</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>1</td><td>0</td><td>2</td></tr>
<tr><td>12</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td></tr>
<tr><td>13</td><td>1</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td></tr>
<tr><td>14</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>4</td><td>0</td><td>1</td></tr>
<tr><td>15</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>3</td><td>0</td><td>1</td></tr>
<tr><td>16</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>12</td></tr>
<tr><td>17</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td></tr>
<tr><td>18</td><td>1</td><td>2</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td></tr>
<tr><td>19</td><td>3</td><td>4</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td></tr>
<tr><td>20</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>2</td></tr>
<tr><td>21</td><td>1</td><td>16</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>3</td></tr>
<tr><td>22</td><td>1</td><td>0</td><td>0</td><td>-</td><td>0</td><td>1</td></tr>
<tr><td>23</td><td>158</td><td>52</td><td>0</td><td>-</td><td>-</td><td>4</td></tr>
<tr><td>24</td><td>2</td><td>0</td><td>0</td><td>-</td><td>-</td><td></td></tr>
<tr><td>25</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>-</td><td>-</td><td></td></tr>
<tr><td>計</td><td>239
(10.3)</td><td>118
(50.1)</td><td>1
(0.5)</td><td>48
(5.3)</td><td>29
(5.5)</td><td>71
(7.3)</td></tr>
</table>
注1) 白色：60W 白熱灯、青色：20W ﾌﾞﾗｯｸﾗｲﾄ、ﾈｯﾄ：ﾈｯﾄﾄﾗｯﾌﾟ
注2) 計は諫早が6月～7月5半旬までの合計値、その他は6月～7月 4 半旬までの合計値で（ ）内は H8～17 年の最大･小値を除く平均値
注3) ーは欠測


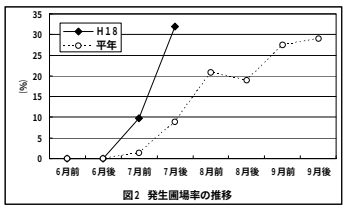
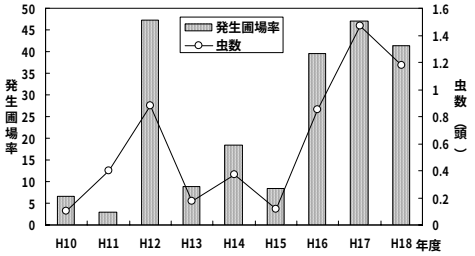
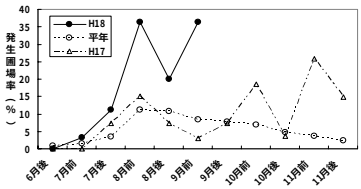
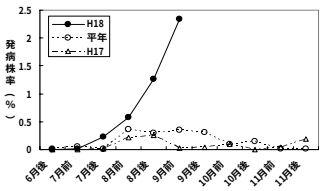
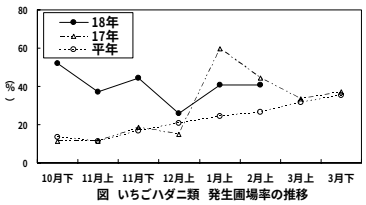
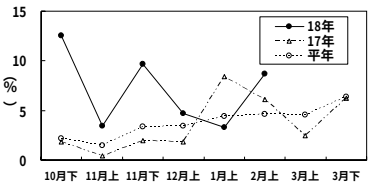
図1 株当たり虫数の推移


図2 発生圃場率の推移
4．防除対策
(1) 7月下旬～8月上旬に株当たり虫数が0.2頭以上または出穂期頃に株当たり虫数が1頭以上の場合は早急に防除する。
(2) それぞれの飛来波ごとの今後の発生は別紙図の様に予測されるので幼虫ふ化揃い期の防除を徹底する。ただし、本虫は圃場間や同一圃場内でも場所によって発生状況が異なることが多いので圃場の見回りを徹底し、発生状況を把握した上で防除をおこなう。
(3) 防除実施後も圃場における発生状況を把握し必要に応じてその後の防除をおこなう。
(4) 本虫は株元を好んで寄生するので薬剤散布は株元に薬剤が十分付着するよう丁寧におこなう。
(5) 薬剤散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守し、薬剤の飛散に十分注意する。
</td></tr>
<tr><td>第9号</td><td>9 月 1 日</td><td>普通期水稲
穂吸汁性カメムシ類</td><td>
1．発生地域（対象地域）　県下全域
2．発生程度　多
3．注意報発令の根拠
(1) 8月下旬の巡回調査（63筆）の結果、出穂した水稲の圃場内における主要な穂吸汁性カメムシ類（ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、シラホシカメムシ、アカスジカスミカメ）の発生は、捕虫網による20回すくい取りで1.2頭（平年　0.5頭）と多く、発生圃場率は41.3％（平年23.3％）と高かった。ホソハリカメムシの発生が最も多く、次いでシラホシカメムシ、アカスジカスミカメの発生が多かった。
(2) 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みであり本虫の発生に好適である。
</td></tr>
</table>

番号	発表月日	対象作物 対象病害虫	情報内容
			 図　水稲圃場内におけるカメムシ類の発生推移（8月下旬） 注）虫数は捕虫網による20回すくい取り当たり虫数 4．防除対策 （1）出穂期以降すでに防除を行った圃場においても発生状況に注意し、発生が認められるようであれば1回目の防除から7～10日後に防除を行う。 （2）カメムシ類の飛来源である圃場周辺のイネ科雑草地も含めて広域一斉防除を行うとより効果が高い。 （3）出穂期以降の圃場周辺の除草はカメムシ類の圃場への侵入を助長するので避ける。 （4）薬剤散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守し、薬剤の飛散に十分注意する。
第10号	9月15日	いちご 炭疽病	1．発生地域（対象地域）　県下全域 2．発生程度　多 3．注意報発令の根拠 (1)9月上旬の巡回調査（33筆）の結果、*G.cingulata* による炭疽病の発病株率は2.3％（平年0.3％）、発生圃場率は36.4％（平年8.4％）であった。*C.acutatum* による炭疽病（通称：葉枯炭疽病）の発病株率は0.8％（平年1.4％）、発生圃場率は15.2％（平年8.5％）であった。 (2)向こう1か月の降水量は多い見込みであり、本病の発生が増加する恐れがある。  図　いちご炭疽病（*G.cingulata*）　発生圃場率の推移  図　いちご炭疽病（*G.cingulata*）　発病株率の推移 4．防除対策 (1)発病株及び発病の恐れのある株は早期除去し、本圃へ持ち込まない。本圃で発病した場合は速やかに圃場外へ持ち出す。 (2)台風や降雨などにより発生の恐れがある時は薬剤散布を徹底する。 (3)薬剤散布にあたっては、使用基準を遵守し、圃場周辺への薬剤の飛散がないように十分注意する。
第11号	平成19年 2月14日	いちご ハダニ類（ナミハダニ、カンザワハダニ）	1．発生地域（対象地域）　県下全域 2．発生程度　多 3．注意報発令の根拠 (1)2月上旬の巡回調査（27筆）の結果、寄生株率は8.7％（4.6％）、発生圃場率は40.7％（26.7％）で1月上旬に比べ寄生株率が急増し、平年よりやや多かった（図）。 (2)向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり、発生量が増加する恐れがある。

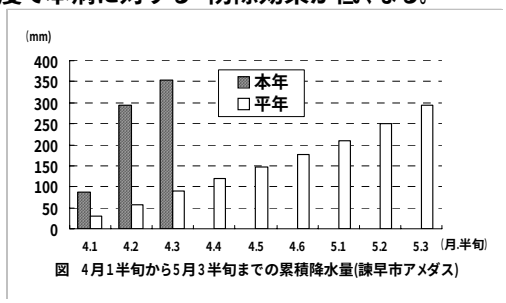
番号	発表月日	対象作物 対象病害虫	情報内容
			 図 いちごハダニ類 発生圃場率の推移  図 いちごハダニ類 寄生株率の推移 4．防除対策 (1)発生初期の防除を徹底する。 (2)薬剤散布は下葉かき等、古葉の整理を行い、散布むらがおこらないように、十分量を丁寧に散布する（薬剤は県病害虫防除基準参照）。 (3)薬剤感受性が低下しやすいので、同一薬剤は連用しない。 (4)薬剤によってはミツバチへの影響があるので、薬剤の選定に注意する。 (5)天敵（チリカブリダニ等）は、県病害虫防除基準等の使用マニュアルを参考に、特性に応じた使い方をする。
第12号	3月15日	茶 カンザワハダニ	1．発生地域（対象地域）　県北地域 2．発生程度　多 3．注意報発令の根拠 （1）3月上旬の巡回調査(16筆)の結果、寄生葉率 3.0%(平年 0.6%)、発生圃場率 43.8%(平年 17.9%)と発生が多かった。 地域別では、東彼杵町での巡回調査(8筆)では発生を確認していないが、世知原町で巡回調査(8筆)では、寄生葉率 7.0%、発生圃場率 87.5%であった。 （2）2月下旬の巡回調査(20筆)の結果、東彼杵町(10筆)では、寄生葉率 0.4%、発生圃場率 10%、世知原町(10筆)では、寄生葉率 1.8%、発生圃場率 60%で、2月下旬以降、世知原町での発生が多い。 4．防除法等 （1）薬剤散布は一番茶萌芽前に行う。摘採時期が近づいているので農薬使用基準に注意する。 （2）薬剤のかけむらがあると防除効果が落ちるので、葉裏まで十分にかかるように散布する。 （3）薬剤感受性が低下しやすいので、同一薬剤は連用しない。

（3）特殊報

番号	発表月日	対象作物 対象病害虫	情報内容
第1号	11月15日	すいか えそ斑点病	1．病害虫名：えそ斑点病 2．病原ウイルス名：Melon necrotic spot virus スイカ系統（MNSV－W） 3．発生作物：スイカ 4．発生場所：西彼杵郡長与町 5．発生確認の経過 平成18年7月に西彼杵郡長与町で栽培されたユウガオ（かちどき）台木の接木スイカ（神武二号）で、果実外観の異常は見られないが、内部果皮部分に黄褐色え死塊が生じ、果肉が水浸状になるなどの症状が発生した（図）。県総合農林試験場、（独）中央農業総合研究センターによる同定の結果、Melon necrotic spot virus のスイカ系統（MNSV-W）による病害であることが確認された。 本病の国内での発生は1989年に鳥取県、1996年に高知で確認されており、本県は3番目の発生である。 6．病徴 果実の内部果皮部分に黄褐色え死塊が生じ、果肉が水浸状になるなどの症状を示し、食味の低下をまねく。

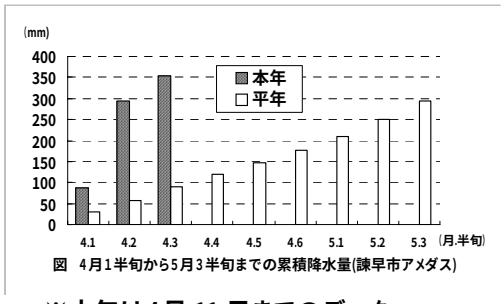
番号	発表月日	対象作物 対象病害虫	情報内容
			また、この発生事例では確認されていないが、茎に退緑色小斑点、後に黄褐色のえ死斑点、下位葉では葉脈え死となり、葉柄や巻ひげにもえ死が現れることがある。 7．病原ウイルスの諸性質 　第一次伝染源は汚染された種子や土壌であり、土壌中に生息する糸状菌の一種オルピディウム属菌による媒介や、感染植物からの汁液伝染により発生が広がる。 　宿主範囲は、スイカ、ユウガオの他、カボチャ（はやと、新土佐）、キュウリ（久留米落合H）等の特定品種に感染が認められている。 8．防除対策 　本病に対する登録薬剤はないので発生を認めた場合は下記の防除に努める。 （1）連作をさけ、ウリ科作物以外を輪作する。スイカを連作する場合は、他病害との防除をかねて土壌消毒を行う。 （2）一度使用した資材は消毒する。 （3）日常の管理作業による接触伝染に注意する。 （4）発病株は感染源となるため見つけしだい処分するほうがよい。ただし、引き抜くと隣の株の根を傷め、感染を助長するので、地際部から茎を切り、地上部を圃場外に持ち出し、地下部は収穫後に圃場外へ持ち出す。

（4）防除情報

番号	発表月日	対象作物 対象病害虫	情報内容
第1号	4月12日	かんきつ そうか病	4月に入って降水量が多く、今後、そうか病の発生が心配されますので、下記の点に留意して防除指導をお願いします。 1．発生状況等 (1)4月前半の巡回調査の結果、新梢での発生は認めない（平年は発生を認めない）。 (2)本年の本病の防除適期は4月2半旬頃であったが、それ以降の降水量が多く（図）、地域に　よっては300mm近くの降水量が記録されている。 (3)平年で発芽期以降の累積降水量が300mmを超えるのは発芽期に次ぐ防除時期となる落弁期頃　（5月4半旬頃）である。 (4)現地で最も使用されているデランフロアブルは、累積降水量200～300mm程度で本病に対する　防除効果が低くなる。  図　4月1半旬から5月3半旬までの累積降水量(諫早市アメダス) ※本年は4月11日までのデータ 2．防除対策 (1)そうか病の薬剤散布をしていない園では早急に行う。 (2)4月上旬に薬剤散布をすませた園でも、例年本病の発生が多い園や発生が心配される園では　追加防除を行う。

4　発生予察情報の発表

(4) 防除情報

番号	発表月日	対象作物 対象病害虫	情報内容
第1号	4月12日	かんきつ そうか病	4月に入って降水量が多く、今後、そうか病の発生が心配されますので、下記の点に留意して防除指導をお願いします。 1．発生状況等 (1) 4月前半の巡回調査の結果、新梢での発生は認めない（平年は発生を認めない）。 (2)本年の本病の防除適期は4月2半旬頃であったが、それ以降の降水量が多く（図）、地域に　よっては 300mm 近くの降水量が記録されている。 (3)平年で発芽期以降の累積降水量が300mmを超えるのは発芽期に次ぐ防除時期となる落弁期頃　（5月4半旬頃）である。 (4)現地で最も使用されているデランフロアブルは、累積降水量 200～300mm 程度で本病に対する　防除効果が低くなる。  図　4月1半旬から5月3半旬までの累積降水量(諫早市アメダス) ※本年は4月 11 日までのデータ 2．防除対策 (1)そうか病の薬剤散布をしていない園では早急に行う。 (2) 4月上旬に薬剤散布をすませた園でも、例年本病の発生が多い園や発生が心配される園では　追加防除を行う。

番号	発表月日	対象作物 対象病害虫	情報内容
第2号	4月21日	ばれいしょ 疫病	ばれいしょの疫病が、今後の気象次第では発生することが予想されます。 今後の気象（特に降雨）情報に注意して、下記のとおり防除指導をお願いします。 1．発生状況 （1）4月に入り断続的な降雨が続き、本病の発生に好適であった。 （2）初発生を4月19日に雲仙市愛野町の一部で確認した。 2．防除対策 （1）本病は発生すると急激に進展・蔓延し被害が大きくなるので、予防防除に重点をおく。 （2）圃場の見回りを徹底し、発生状況を観察する。発生を認めたら直ちに薬剤散布する。その後は本病の進展状況に応じて7～10日毎に薬剤散布する（薬剤は防除基準参照）。 （3）薬剤散布は、薬剤が下葉に達するように、十分量を散布する。 （4）塊茎への感染を防止するため、圃場の排水対策を徹底する。 （5）収穫時期が近づいているので、薬剤散布に際しては農薬の使用基準を遵守する。 図1　葉の病徴 図2　茎の病徴
第3号	5月2日	果樹全般 カメムシ類	本年はチャバネアオカメムシの越冬量が多く、今後果樹園への飛来が多くなることが予想されますので、下記の点に注意して防除指導をお願いします。 1　発生状況 (1) 平成18年1月下旬～2月上旬に常緑広葉樹林の落葉中におけるチャバネアオカメムシ成虫の越冬量を県内18地点で調査した結果、1．6頭／㎡で、平年値0．4頭／㎡に比べ多かった。過去10か年では、平成8年に次いで多く、ほぼ平成14年並の越冬量であった（図）。 (2) フェロモントラップでは、諫早市で4月6半旬、多良見町で4月4半旬、有家町で4月5半旬に初誘殺を確認した。 2　防除対策 (1) 越冬量と4月から8月上旬までの予察灯誘殺量は相関が高く（図）、今後、8月上旬頃までは果樹園への飛来が多いと予測されるので、この期間は特に発生に注意する。 (2) 飛来時期や飛来量は園によって差があるので、園をなるべくこまめに見回り、早期発見、早期防除に努める。 (3) 飛来を認めたら、早急に薬剤散布による防除を行う。 (4) カメムシ類は夜間に果樹園での密度が高まるので防除は夕方または早朝に行う。 (5) ハウス栽培では、開口部を防虫網（4mm 目以下）で被覆する。また既に被覆済のハウスでも防虫網の破損がないか点検し、カメムシ類の侵入を防ぐようにする。 (6) なしでは袋かけ作業が遅れないように注意する。

番号	発表月日	対象作物 対象病害虫	情報内容
			(7) 今後の発生状況は予察情報や病害虫防除所ホームページに掲載する予定であるので防除の参考にする。
第4号	6月19日	いちご 炭疽病	いちご炭疽病が育苗床で発生しています。また、葉枯炭疽病（俗称）も一部地域で発生しています。下記の点に留意して防除指導をお願いします。 1．発生状況 （1）6月上旬の巡回調査（33筆）の結果、*C.acutatum* による炭疽病（俗称：葉枯炭疽病）は　発生を認めなかった（平年の発病株率0.2%、発生圃場率4.1%）。*G.cingulata* による炭疽病は発生を認めなかった（平年の発病株率0.1%、発生圃場率1.4%）。 （2）病害虫防除所の依頼診断により、炭疽病の発生は6件（昨年の同じ時期は4件）認められた。そのうち2件について現地調査したところ、いずれも微発生であった。 （3）病害虫防除員による調査報告では、一部の地区で多発生圃場が認められているが、多くの地区では平年並～やや少となっている。 （4）昨年は定植後の本圃において県内各地で本病が多発しており、育苗圃場などにおける病原菌の密度が高くなっていると予想される。 （5）気象予報によると向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量、日照時間は平年並と予想されており、今後の気象次第では発生が増加することが予想される。 2．防除対策 （1）育苗床が多湿にならないように、連続した長時間の潅水はしない。密植を避け、排水対策を確実に行う。 （2）高設育苗や全面マルチを行い、降雨等による地面からの病原菌の跳ね上がりを防止する。 （3）発病した子苗およびその周辺の株は速やかに処分する。また、発病した親株の周辺の子苗は育苗せずに処分する。除去した発病株や茎葉は、圃場内やその周辺に放置しない。 （4）葉の展葉間隔にあわせて定期的に薬剤防除する。*C.acutatum* による炭疽病には、バイコラール水和剤は防除効果が低いので注意する。
第5号	7月 4日	水稲 ウンカ類、コブノメイガ	水稲のウンカ類、コブノメイガの飛来状況について ウンカ類及びコブノメイガの飛来が6月5半旬から7月1半旬にかけて断続的に認められています。飛来状況は以下のとおりですので注意してください。 1．飛来状況等 （1）セジロウンカ ア　6月5半旬から7月1半旬に断続的に飛来があり、6月25～27日、7月1～2日にかけてやや多い飛来が認められた（表1）。 イ　6月27日、7月3日の県予察圃場調査（普通期、無防除、諫早市）

番号	発表月日	対象作物 対象病害虫	情報内容

の結果、株当たり成虫数はそれぞれ1.5頭、4.0頭であった。

ウ　6月5～6半旬の巡回調査（92筆）の結果、普通期水稲における株当たり虫数は0.5頭（平年0.2頭）であった。

（2）トビイロウンカ

ア　6月12日に予察灯（五島市岐宿町）で誘殺を初確認した（平年　6月10日）。その後、6月5半旬から7月1半旬にかけて断続的にやや少ない飛来が認められた（表2）。

イ　6月27日、7月3日の県予察圃場調査（普通期、無防除、諫早市）の結果、株当たり成虫数はそれぞれ0頭、0.02頭であった。

ウ　6月5～6半旬の巡回調査（92筆）の結果、普通期水稲において寄生を認めなかった（平年　寄生を認めない）。

（3）コブノメイガ

6月5半旬から7月1半旬にかけて断続的にやや少ない飛来を認めた（表2）。

表1　予察灯及びネットトラップにおけるセジロウンカの誘殺状況

月 日	諫 早			島原	佐世保	岐宿
	白色灯	青色灯	ﾈｯﾄﾄﾗｯﾌﾟ	白色灯	白色灯	白色灯
6.21	0	0	0	0	0	0
22	1	1	0	1	2	0
23	26	319	0	1	0	37
24	27	97	0	10	7	12
25	90	396	6	18	22	0
26	738	1976	1	121	191	
27	149	517	1	754	262	
28	104	48	0	375	177	
29	55	77	0			
30	12	22	1			
7.1	3	2	5			
2	251	120	0			
3			2			

表2　予察灯及びネットトラップにおけるトビイロウンカ、コブノメイガの誘殺状況

月 日	トビイロウンカ						コブノメイガ	
	諫 早			島原	佐世保	岐宿	諫早	
	白色灯	青色灯	ﾈｯﾄﾄﾗｯﾌﾟ	白色灯	白色灯	白色灯	蛍光灯採集箱	追い出し虫数（頭/10㎡）
6.21	0	0	0	0	0	0	0	0
22	0	0	0	0	0	0	0	0
23	0	0	0	0	0	0	0	0.2
24	0	0	0	0	0	0	0	0.1
25	0	0	0	0	1		0	0
26	1	1	0	1	1		0	0
27	0	1	0	0	0		0	0.1
28	1	0	0	0	0		0	0.8
29	0	0	0				0	0
30	0	0	0				0	0
7.1	0	0	0				0	0
2	1	0	0				0	0.4
3			0				0	0.4

2．防除対策

（1）セジロウンカ

ア　6月中･下旬以降に移植し、ウンカ類に効果のある箱施薬剤を処理していない圃場において株当たり成虫数が10頭以上の場合は早急

番号	発表月日	対象作物 対象病害虫	情報内容
			イ　地域や圃場によって飛来状況が異なるので圃場での発生状況に注意する。 ウ　今後も飛来が続くと予想されるので飛来状況や圃場での発生状況に十分注意する。 (2)トビイロウンカ、コブノメイガ 　現在のところやや少ない飛来量であるが、今後も飛来が続くと予想されるので飛来状況や圃場での発生状況に十分注意する。
第6号	7月 14 日	水稲 ウンカ類、コブノメイガ	水稲のウンカ類、コブノメイガの防除対策について 　ウンカ類及びコブノメイガの飛来が6月5半旬から7月2半旬にかけて断続的に認められました。飛来・発生状況は以下のとおりですので注意してください。 1．飛来・発生状況 (1)セジロウンカ ア　6月5半旬から7月2半旬に断続的に飛来があり、6月25～27日、7月1～2日にかけてやや多い飛来、7月4～5日に多い飛来が認められた(表1)。 イ　7月2～3半旬の巡回調査(普通期、113筆)の結果、株当たり虫数は4.3頭 　(0.8頭)、発生圃場率は86.7%(42.9%)であった。 ウ　6月27日、7月3日、7月6日の県予察圃場調査(諫早市、普通期、無防除)の結果、株当たり成虫数はそれぞれ1.5頭、4.0頭、8.4頭であった。 (2)トビイロウンカ ア　6月5半旬から7月1半旬にかけて断続的にやや少ない飛来、7月4～5日に多い飛来が認められた(表2) イ　7月2～3半旬の巡回調査(普通期、113筆)の結果、株当たり虫数は0.02頭(平年0.00頭)、発生圃場率9.7%(1.9%)であった。 ウ　7月6日の県予察圃場調査(諫早市、普通期、無防除)の結果、株当たり成虫数は0.04頭であった。 (3)コブノメイガ ア　6月5半旬から7月2半旬にかけて断続的にやや少ない飛来を認めた(表2)。 イ　7月2～3半旬の巡回調査(普通期、113筆)の結果、食害株率は0.1%(3.3%)、発生圃場率は9.7%(27.7%)であった。 2．防除対策(普通期) (1)セジロウンカ ア　ウンカ類に効果のある箱施薬剤を処理した圃場においても発生状況に注意し、多数の幼虫の発生が認められる場合は早急に防除する。 イ　地域や圃場によって発生状況が異なるので圃場での発生状況に注意する。 (2)トビイロウンカ ア　今後の圃場での発生状況に十分注意し、7月下旬～8月上旬に100株当たり20頭以上の成虫の寄生が認められる場合、幼虫ふ化揃い期に防除を行う。 イ　株元を好んで寄生するので株元へ十分に薬剤が付着するよう丁寧に薬剤散布をおこなう。 ウ　圃場間や同一圃場でも場所により発生状況が異なることが多いので圃場の見回りを徹底し、発生状況の把握に努める。 (3)コブノメイガ 　薬剤防除は、粉剤・液剤では成虫発生最盛期の7～10日後、粒剤では成虫発生最盛期におこなう。 (4)トビイロウンカ及びコブノメイガの今後の発生は別紙図のように予測される。ただし、今後の気温推移や地域、圃場によっても発生状

番号	発表月日	対象作物 対象病害虫	情報内容

況が異なる場合があるので圃場での発生状況を把握した上で防除をおこなう。

(5) 薬剤散布にあたっては、薬剤のドリフトに十分注意する。

表1　セジロウンカの誘殺状況

月 日	諫 早			島原	佐世保	岐宿
	白色灯	青色灯	ネット	白色灯	白色灯	白色灯
6.21	0	0	0	0	0	0
22	1	1	0	1	2	0
23	26	319	0	1	0	37
24	27	97	0	10	7	12
25	90	396	6	18	22	0
26	738	1976	1	121	191	3958
27	149	517	1	754	262	96
28	104	48	0	375	177	18
29	55	77	0	74		0
30	12	22	1	71	4	11
7.1	3	2	5	3	2	289
2	251	120	0	1825	7	642
3	390	523	2	3978	157	191
4	3	9	107	17	875	14
5	2647	2611	16	5692	3	255
6	1994	2729	2		2619	144
7	2803	2573	1			25
8	406	1205	3			0
9	15	143	16			0
10	3	2	2			
11	29	3	0			
12	7	13	0			
13	4	11	0			
計	9780 (1254.0)	13397 (2091.4)	164 (100.8)	12944 (6489.8)	4331 (405.9)	5527 (243.3)

注1) 白色：60W 白熱灯、青色：20W ﾌﾞﾗｯｸﾗｲﾄ、ﾈｯﾄ：ﾈｯﾄﾄﾗｯﾌﾟ

注2) 計は諫早が6月～7月2半旬までの合計値、その他は6月～7月1半旬までの合計値で（ ）内は H8～17 年の最大･小値を除く平均値

表2　トビイロウンカ、コブノメイガの誘殺状況

月 日	トビイロウンカ						コブノメイガ	
	諫 早			島原	佐世保	岐宿	諫早	
	白色灯	青色灯	ネット	白色灯	白色灯	白色灯	蛍光灯採集箱	追い出し虫数(頭/10㎡)
6.21	0	0	0	0	0	0	0	0
22	0	0	0	0	0	0	0	0
23	0	0	0	0	0	0	0	0.2
24	0	0	0	0	0	0	0	0.1
25	0	0	0	0	1	0	0	0
26	1	1	0	1	1	6	0	0
27	0	1	0	0	0	0	0	0.1
28	1	0	0	0	0	0	0	0.8
29	0	0	0	0	0	0	0	0
30	0	0	0	0	0	0	0	0
7.1	0	0	0	0	0	11	0	0
2	1	0	0	1	1	1	0	0
3	1	1	0	3	0	2	0	0.4
4	0	0	1	0	0	0	0	0.4

<table>
<tr><th>番号</th><th>発表月日</th><th>対象作物
対象病害虫</th><th>情報内容</th></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>
<table>
<tr><td>5</td><td>47</td><td>24</td><td>0</td><td>12</td><td>25</td><td>19</td><td>1</td><td>0.3</td></tr>
<tr><td>6</td><td>11</td><td>10</td><td>0</td><td></td><td></td><td>5</td><td>0</td><td>1.2</td></tr>
<tr><td>7</td><td>9</td><td>5</td><td>0</td><td></td><td></td><td>0</td><td>2</td><td>1.5</td></tr>
<tr><td>8</td><td>1</td><td>2</td><td>0</td><td></td><td></td><td>0</td><td>1</td><td>1.3</td></tr>
<tr><td>9</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td></td><td></td><td></td><td>0</td><td>0.5</td></tr>
<tr><td>10</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td></td><td></td><td></td><td>0</td><td>0.4</td></tr>
<tr><td>11</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td></td><td></td><td></td><td>0</td><td>0</td></tr>
<tr><td>12</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td></td><td></td><td></td><td>0</td><td>0.1</td></tr>
<tr><td>13</td><td>1</td><td>0</td><td>0</td><td></td><td></td><td></td><td>0</td><td>0.1</td></tr>
<tr><td>計</td><td>72
(5.6)</td><td>44
(6.1)</td><td>1
(0.1)</td><td>17
(1.5)</td><td>28
(0.9)</td><td>43
(3.4)</td><td>4
(4.7)</td><td></td></tr>
</table>
注1）白色：60W 白熱灯、青色：20W ﾌﾞﾗｯｸﾗｲﾄ、ﾈｯﾄ：ﾈｯﾄﾄﾗｯﾌﾟ
注2）コブノメイガの追い出し虫数は県予察圃（諫早市、早期、無防除）の 100 ㎡調査における成虫数を 10 ㎡当たりに換算
注3）計は諫早が6月～7月2半旬までの合計値、その他は6月～7月1半旬までの合計値で（ ）内は H8～17 年の最大・小値を除く平均値）
</td></tr>
<tr><td>第7号</td><td>7月 14 日</td><td>びわ
がんしゅ病</td><td>
びわがんしゅ病の発生が増加しています。下記の点に注意して防除指導をお願いします。
1．発生状況
（1）7月上旬の巡回調査（10筆）の結果、発生圃場率100％（31.7％）、発病枝葉率37.0％（0.9％）で、発病枝葉率は過去7年間で最も多い発生となっている。
（2）新芽に感染し、芽が褐色に変色し枯死する芽枯れの発生が特に多い（写真）。
（3）ナシヒメシンクイのフェロモントラップ（諫早市）での誘殺量は平年よりやや多く推移している。
2．防除対策
（1）がんしゅ病菌は剪定や芽かき後の傷口から感染するため、剪定や芽かき後に薬剤による防除を行う。また、芽かきはできるだけ芽が小さいときに行い、5～6㎝に伸長した芽の芽かきを行う場合は剪定バサミを使用し、傷口をきれいにする。
（2）ナシヒメシンクイの食入跡から感染が拡大するので、がんしゅ病の防除と同時にナシヒメシンクイの防除も行う。
（3）幹に病斑がある場合は罹病部を削り取り、薬剤を塗布して傷口を保護する。
（4）本病は台風などによる強風雨によって感染が助長されるので、台風接近前に薬剤の散布を行い、感染の拡大を防ぐ。

写真　びわ新梢の芽枯れ症状
</td></tr>
</table>

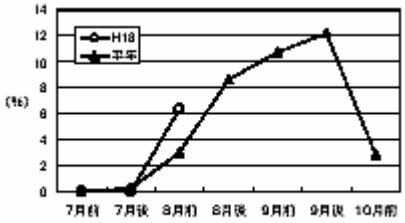
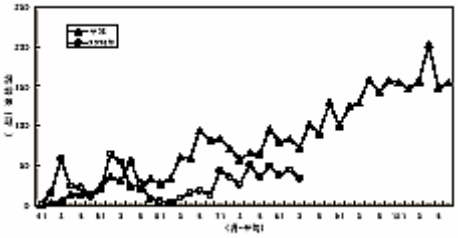
<table>
<tr><th>番号</th><th>発表月日</th><th>対象作物
対象病害虫</th><th>情報内容</th></tr>
<tr><td>第8号</td><td>8月16日</td><td>大豆
ハスモンヨトウ</td><td>大豆のハスモンヨトウの防除対策について
8月に入り大豆においてハスモンヨトウの発生が増加傾向にあります。下記の点に留意して防除指導をお願いします。
1．発生状況等
(1) 8月上旬の巡回調査（18筆）の結果、幼虫の寄生株率は6.3％（平年3.0％）であった（図1）。若齢幼虫の食害による白変葉の発生圃場率は44.4％（平年34.2％）であった。
(2) 8月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、幼虫の寄生株率は6.0％（平年1.1％）であった。
(3) フェロモントラップ（諫早市）の誘殺量は平年よりやや少なく推移しているがやや増加傾向にある（図2）。
(4) 向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており本虫の発生に好適である。
2．防除対策等
(1) 圃場の見回りを徹底し、白変葉が散見されるようになったら早急に防除を行う。
(2) 幼虫の齢が進むと食害量が増加するとともに薬剤の効果も劣ってくるので薬剤散布は若齢幼虫期に行う。
(3) 薬剤散布にあたっては農薬の使用基準を遵守し、圃場周辺への飛散がないよう十分注意する。
 

図1 ハスモンヨトウ幼虫の寄生株率の推移（巡回調査）
 
図2 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況（諫早市）
平年：H8～H17の平均値（最大・最小値除く）</td></tr>
<tr><td>第9号</td><td>9月4日</td><td>普通期水稲
トビイロウンカ</td><td>トビイロウンカの防除対策について
8月以降、普通期水稲におけるトビイロウンカの発生は平年並で推移していますが、一部圃場ではやや多い発生となっています。また、8月30～31日にかけて新たな飛来が認められています。トビイロウンカが多い圃場では今後坪枯れの発生が予想されますので以下の点に留意して防除指導をお願いします。
1．発生状況等
(1) 8月下旬の巡回調査（94筆）の結果、株当たり虫数は0.07頭（平年　0.09頭）、発生圃場率は22.3％（平年　18.9％）と平年並であった（図1、2）。ただし、株当たり虫数が2～3頭以上の圃場も認められ、そのような圃場では今後坪枯れが発生する可能性が高いと考えられる。
(2) 8月30～9月1日にかけ、県予察圃場（諫早市、無防除）において飛来と思われるトビイロウンカ長翅型成虫の急激な増加が認められたため、9月1日に諫早市、東彼杵町、波佐見町において圃場調査（37筆）を行った結果、トビイロウンカ長翅型成虫の株当たり虫数は0～4.4頭（平均0.6頭）、発生圃場率は89.2％であった。
(3) 気象予報によると向こう1か月の気温は平年より高く、降水量は平年並の見込みであり本虫の発生に好適である。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><th>番号</th><th>発表月日</th><th>対象作物
対象病害虫</th><th>情報内容</th></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>

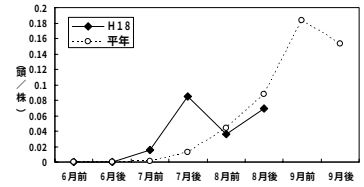


図1 株当たり虫数の推移

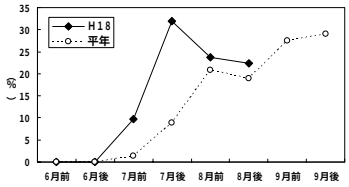


図2 発生圃場率の推移

表 トビイロウンカの誘殺状況

<table>
<tr><th rowspan="2">月 日</th><th colspan="3">諫 早</th><th>島原</th><th>佐世保</th><th>岐宿</th></tr>
<tr><th>白色灯</th><th>青灯灯</th><th>ﾈｯﾄﾄﾗｯﾌﾟ</th><th>白色灯</th><th>白色灯</th><th>白色灯</th></tr>
<tr><td>8.26</td><td>1</td><td>0</td><td>0</td><td>19</td><td>3</td><td>0</td></tr>
<tr><td>27</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>1</td><td>0</td></tr>
<tr><td>28</td><td>84</td><td>40</td><td>0</td><td>0</td><td>150</td><td></td></tr>
<tr><td>29</td><td>11</td><td>4</td><td>0</td><td>0</td><td>17</td><td></td></tr>
<tr><td>30</td><td>112</td><td>30</td><td>0</td><td>0</td><td>129</td><td></td></tr>
<tr><td>31</td><td>358</td><td>294</td><td>0</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>9.1</td><td>94</td><td>45</td><td>0</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>2</td><td>85</td><td>43</td><td>0</td><td></td><td></td><td></td></tr>
</table>

注）白色：60W 白熱灯、青色：20W ﾌﾞﾗｯｸﾗｲﾄ、ﾈｯﾄ：ﾈｯﾄﾄﾗｯﾌﾟ

2．防除対策

（1）発生は圃場間や同一圃場内でもばらつきが大きいので、圃場の見回りを徹底し、できるだけ圃場全体の発生状況を把握する。

（2）新たに飛来が認められているので、これまでに防除を行った圃場においても発生状況に注意し、必要に応じて追加防除を行う。

（3）9月上旬に成・幼虫数が株当たり5頭以上認められる場合は坪枯れの発生が予想されるので早急に防除を行う。

（4）本虫は株元を好んで寄生するので薬剤散布は株元に十分薬剤が付着するよう丁寧に行う。

（5）薬剤散布にあたっては農薬の使用基準を遵守し、圃場周辺への飛散がないよう十分注意する。

</td></tr>
<tr><td>第10号</td><td>11月15日</td><td>いちご
ハダニ類（ナミハダニ、カンザワハダニ）</td><td>

いちご　ハダニ類（ナミハダニ、カンザワハダニ）の防除対策について

いちご　ハダニ類の発生が多い状況が続いているので以下の点に留意して防除指導をお願いします。

1．　発生状況

（1）11月上旬の巡回調査（27筆）の結果、寄生株率は3.4%（平年1.4%）、発生圃場率は37.0%（平年11.1%）であった。

（2）巡回調査の結果、本圃定植後の発生量は10月上旬までは平年並で推移したが、10月下旬から増加した（図）。

（3）向こう1か月の気温は平年並か高い見込みであり、今後の気象条件によっては、発生量が増加する恐れがある。

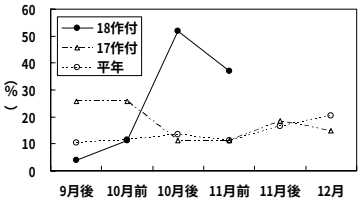


図 いちごハダニ類 発生圃場率の推移

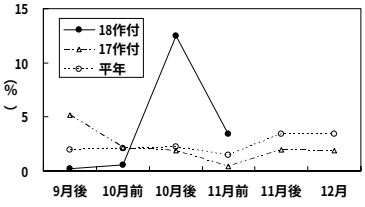


図 いちごハダニ類 寄生株率の推移

2．防除対策

（1）発生初期の防除を徹底する。

（2）薬剤散布は、散布むらがおこらないように、十分量を丁寧に散布する。

（3）薬剤感受性が低下しやすいので、同一薬剤は連用しない。

</td></tr>
</table>

<table>
<tr><th>番号</th><th>発表月日</th><th>対象作物
対象病害虫</th><th>情報内容</th></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>(4) 薬剤によってはミツバチへの影響があるので、薬剤の選定に注意する。
(5) 天敵(チリカブリダニ等)は、県病害虫防除基準等の使用マニュアルを参考に、特性に応じた使い方をする。</td></tr>
<tr><td>第11号</td><td>平成19年
2月14日</td><td>きゅうり
べと病
うどんこ病
褐斑病
コナジラミ類</td><td>きゅうり　べと病、うどんこ病、褐斑病、コナジラミ類の防除対策について

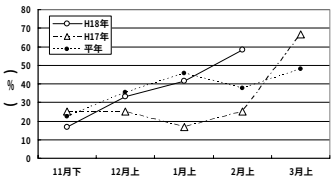
2月上旬の巡回調査の結果、下記病害虫の発生量が平年に比べ多い状況です。今後、発生の拡大が心配されますので、下記の点に留意して防除指導をお願いします。
<u>1. べと病</u>
(1) 発生状況
2月上旬の巡回調査(12筆)の結果、発病葉率は11.3%(平年4.4%)、発生圃場率は58.3%(平年37.8%)であった。
 

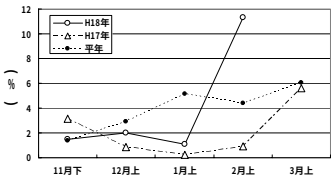
図 きゅうり べと病発生圃場率の推移
 

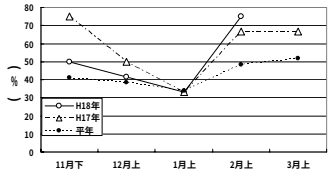
図 きゅうり べと病発病葉率の推移
(2) 防除対策
ア 病勢が進行すると防除困難となるため、早期発見・早期防除に努める。
イ ハウス内では換気に注意し、多湿を避ける。
ウ 樹勢が弱ると発生しやすいので、肥切れにならないよう肥培管理に注意する。
<u>2. うどんこ病</u>
(1) 発生状況
2月上旬の巡回調査(12筆)の結果、発病葉率は9.4%(平年4.4%)、発生圃場率は75.0%(平年48.5%)であった。
 

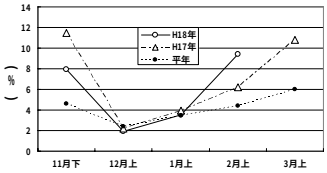
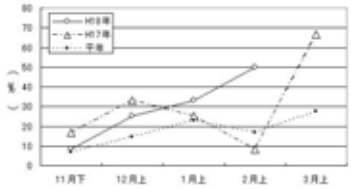
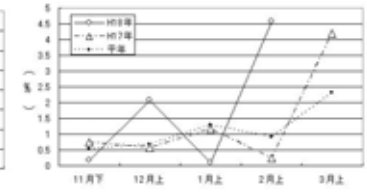
図 きゅうり うどんこ病発生圃場率の推移
 

図 きゅうり うどんこ病発病葉率の推移
(2) 防除対策
ア 病勢が進行すると防除困難となるため、早期発見・早期防除に努める。
イ 薬剤耐性菌を生じる恐れがあるので、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
<u>3. 褐斑病</u>
(1) 発生状況
2月上旬の巡回調査(12筆)の結果、発病葉率は4.6%(平年0.9%)、発生圃場率は50.0%(平年16.6%)であった。
 
図 きゅうり 褐斑病発生圃場率の推移
 
図 きゅうり 褐斑病発病葉率の推移
(2) 防除対策
ア 病勢が進行すると薬剤による防除は困難であるため、早期発見・早期防除に努める。</td></tr>
</table>

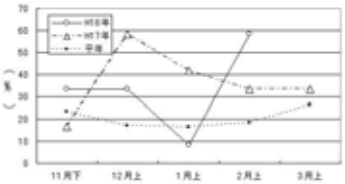
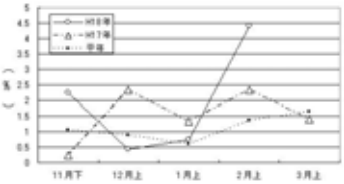
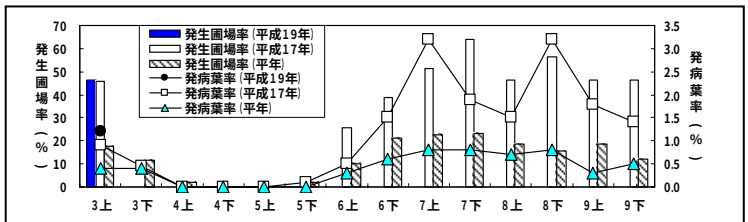
<table>
<tr><th>番号</th><th>発表月日</th><th>対象作物
対象病害虫</th><th>情報内容</th></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>イ　病斑は伝染源となるため、発病部や下位の老化葉は取り除きハウス外に持ち出して処分する。
ウ　多湿条件では発生を助長するので、換気に注意し、できるだけ室温を30℃以下に下げる。
エ　窒素過多は発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。
4．コナジラミ類（ﾀﾊﾞｺｺﾅｼﾞﾗﾐ類、ｵﾝｼﾂｺﾅｼﾞﾗﾐ）
（1）発生状況
2月上旬の巡回調査（12筆）の結果、寄生葉率は4.4％（平年1.4％）、発生圃場率は58.3％（平年18.5％）であった。
 
図 きゅうり コナジラミ類発生圃場率の推移
 
図 きゅうり コナジラミ類寄生葉率の推移
（2）防除対策
ア　多発すると薬剤の効果が上がりにくいので、黄色粘着板などを利用して発生状況を把握し、早期発見･早期防除に努める。
イ　ほ場周辺や施設内の雑草は、生息場所になるので、除草する。
ウ　薬剤は、抵抗性の発達を防止するために、異なる系統の薬剤をローテーション散布するとともに葉裏に薬剤が付着するよう丁寧に散布する。</td></tr>
<tr><td>第12号</td><td>3月15日</td><td>かんきつ
かいよう病</td><td>かんきつかいよう病の越冬病斑が多い状況となっています。今後の気象条件によっては、春葉や幼果に多発生する可能性がありますので、下記の点に留意して防除指導をお願いします。
1．発生状況
(1)3月上旬の巡回調査(39筆)の結果、発病葉率(旧葉)は1.2％(平年0.4％)、発生圃場率は46.2％(平年17.8％)で、多発生圃場も認められた（図）。なお、今年の発病葉率（1.2％）は多発生年であった平成17年（0.9％）並である。
(2)ここ数年かいよう病が多い傾向にある。
(3)夏秋梢に形成された病斑が見られ、これらは伝染力が強いため今後の天候によっては感染が拡大する恐れがある。
 

図　かいよう病発病葉率と発生圃場率の推移
2．防除法等
(1)発病枝や葉を除去する。
(2)できるだけ発芽前までに銅水和剤を散布する。コサイドＤＦや園芸ボルドーでは、クレフノンを加用する。
(3)品種によって耐病性が異なるので、弱い品種では特に発生に注意する(表)。発芽後に発病が見られた場合は開花期から落弁期にかけても防除を行う。
(4)させぼ温州は、温州みかんの中では比較的本病に弱いので注意する。</td></tr>
</table>

番号	発表月日	対象作物 対象病害虫	情報内容
第13号	3月15日	果樹共通 クワゴマダラヒトリ	クワゴマダラヒトリの発生が多い状況となっています。かんきつ、びわ、ぶどう、なし等が被害を受ける可能性がありますので、下記の点に留意して防除指導をお願いします。 1．発生状況 (1)昨年10月に実施した産卵樹上（アカメガシワ、カラスザンショウ）における幼虫巣の発生調査の結果、発生は認められなかったが、11月には西彼半島北部地域や県北地域で幼虫巣の発生が目立った。なお、10月の調査は、産卵樹の新梢が台風によって被害を受けた状態で実施した。 (2) 県北農業改良普及センターによると露地及び施設びわ園で発生が認められる。 (3) 病害虫防除員の報告によると時津町、西海町、松浦市のかんきつ園や周辺の雑草で発生が多い。また、諫早市でも発生が認められる。 写真　かんきつ園の雑草に生息するクワゴマダラヒトリ老齢幼虫 2．防除法等 (1) 果樹園で発生すると新梢や花蕾に大きな被害を及ぼすことがあるので、園地をこまめに見回り早期発見に努める。 (2) 果樹園周辺にアカメガシワ、カラスザンショウ、桑などの産卵樹が多いと被害を受けやすい。 (3) 果樹園内や周辺の除草を行い、果樹園への侵入を防ぐ。ただし、すでに園内に侵入している園で除草を行うと、樹上に移動し新梢の被害が拡大する場合があるので注意する。 (4) 発生を認めた園では薬剤による防除を行う。ただし、5月中旬頃まで圃場周辺から継続的に侵入してくる場合があるので残効の長い薬剤を使用する。また、かんきつ以外では本虫に対する登録薬剤はない。
第14号	3月26日	麦類 赤かび病	平成19年産の麦類は、冬期の気温が平年より高く推移したため、生育が早く出穂期が平年より早くなっています。赤かび病の効果的な防除のためには、麦の生育ステージに応じた適期防除が重要です。下記の点に留意して防除の徹底をお願いします。 防除対策 (1) 本病は、出穂期以降に気温が高く曇雨天が続くと多発生するので、出穂期以降の気象推移に注意する。 (2) 発病を認めてからの薬剤防除では効果が劣るので適期防除に努める。開花最盛期（出穂期の概ね7日後）とその7～10日後に薬剤散布する。二条大麦では穂揃い期とその7～10日後に薬剤散布する。曇雨天が続く場合は、必要に応じて追加防除を行う。 (3) 麦の生育ステージは圃場により異なるので圃場の見回りに努め、生育ステージを把握した上で防除を実施する。

番号	発表月日	対象作物 対象病害虫	情報内容
			参考　各品種の出穂期（長崎県総合農林試験場、諫早市）

品種名	平年値		本年値	
	播種期	出穂期	播種期	出穂期
ニシノチカラ	11/16	3/31	11/17	3/21
ニシノホシ	11/16	3/30	11/17	3/20
イチバンボシ	11/16	3/30	11/17	
御島裸	11/16	4/7	11/17	
チクゴイズミ	11/24	4/8	11/21	
シロガネコムギ	11/24	4/8	11/21	

注）平年値は過去5か年の平均値
　本年値の出穂期は3月26日時点

（5）技術情報

番号	発表月日	対象作物 対象病害虫	情報内容
第1号	5月2日	茶 クワシロカイガラムシ	

茶のクワシロカイガラムシの防除対策について

　茶のクワシロカイガラムシの発生が近年目立ち問題となっています（図）。また、第1世代の防除時期が近づいていますので、下記の点を参考にして防除指導を行ってください。

防除対策

1　本虫は年3回（5月中旬～下旬、7月下旬～8月上旬、9月中旬～下旬）に発生するが、そのうち5月のふ化直後の薬剤散布が最も重要である。
2　1回脱皮してロウ質のカイガラを作りはじめると薬剤の効果が低下するので、下表の第1世代予測ふ化盛期当日～5日後に散布する。なお、独自にピーク日を現地調査し防除適期を判断している地域ではその判断を優先する。
3　株内の枝や株元に薬液がかかるように十分量散布する。
4　発生を認めていない園でも新たな発生に注意する。
5　薬剤散布に当たっては、使用基準を遵守する。

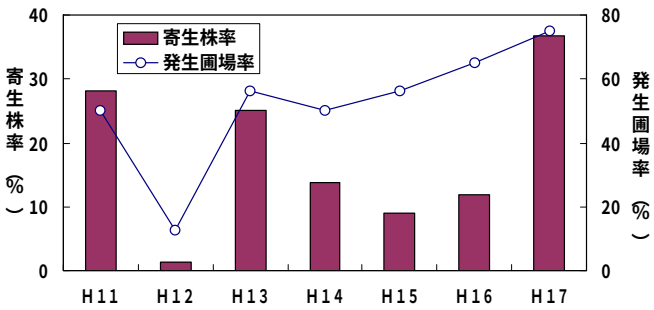


図　クワシロカイガラムシ第1世代寄生株率及び発生圃場率
（6月巡回調査による）

表　クワシロカイガラムシ第1世代のふ化盛期予測日

地　区　名	東彼赤木	東彼杵 太の原	世知原板山	世知原木浦原	五島大津
平成18年	5／23	5／28	5／28	5／25	5／15
平成17年	5／17	5／26	5／26	5／22	5／12

注1：ふ化盛期予測日は「有効積算温度則による防除適期予測法（東彼杵茶業支場）」により算出した。
注2：使用する気温データには、ながさき農林業情報システム 500m メッシュ気象データを利用した。
注3：平成18年4月30日現在で予測し（1月1日～4月30日まで実測

<table>
<tr><th>番号</th><th>発表月日</th><th>対象作物
対象病害虫</th><th>情報内容</th></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>値)、5月1日以降のデータは平年値を利用した。
注4：同一地区内でも標高や土地条件で発生ピーク日が異なるので注意する。</td></tr>
<tr><td>第2号</td><td>7月7日</td><td>茶
ｸﾜｼﾛｶｲｶﾞﾗﾑｼ</td><td>茶のクワシロカイガラムシの防除対策について
第2世代の防除時期が近づいていますので、下記の点を参考にして防除指導をお願いします。
防除対策
1 本虫は年3回発生するが、それぞれの世代のふ化盛期が防除適期である。
2 1回脱皮してロウ質のカイガラを作りはじめると薬剤の効果が低下するので、下表の第2世代予測ふ化盛期当日～5日後に散布する。なお、独自にピーク日を現地調査し防除適期を判断している地域ではその判断を優先する。
3 株内の枝や株元に薬液がかかるように十分量散布する。
4 発生を認めていない園でも新たな発生に注意する。
5 薬剤散布に当たっては、使用基準を遵守する。

表 クワシロカイガラムシ第2世代のふ化盛期予測日
<table>
<tr><th>地 区 名</th><th>東彼杵
赤木</th><th>東彼杵
太の原</th><th>世知原
板山</th><th>世知原
木浦原</th><th>五島
大津</th></tr>
<tr><td>平成18年</td><td>7／17</td><td>7／25</td><td>7／26</td><td>7／23</td><td>7／13</td></tr>
<tr><td>平成17年(参考)</td><td>7／14</td><td>7／25</td><td>7／27</td><td>7／22</td><td>7／13</td></tr>
</table>
注1：ふ化盛期予測日は「有効積算温度則による防除適期予測法（東彼杵茶業支場）」により算出した。
注2：使用する気温データには、ながさき農林業情報システム 500m メッシュ気象データを利用した。
注3：平成18年7月6日現在で予測し（1月1日～7月6日まで実測値）、7月7日以降のデータは平年値を利用した。
注4：同一地区内でも標高や土地条件で発生ピーク日が異なるので注意する。</td></tr>
<tr><td>第3号</td><td>8月7日</td><td>果樹
カメムシ類</td><td>果樹カメムシ類当年世代成虫の発生量及び果樹園への飛来時期の予測について

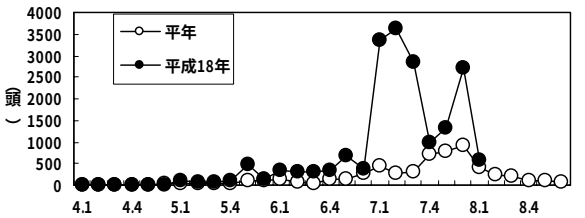
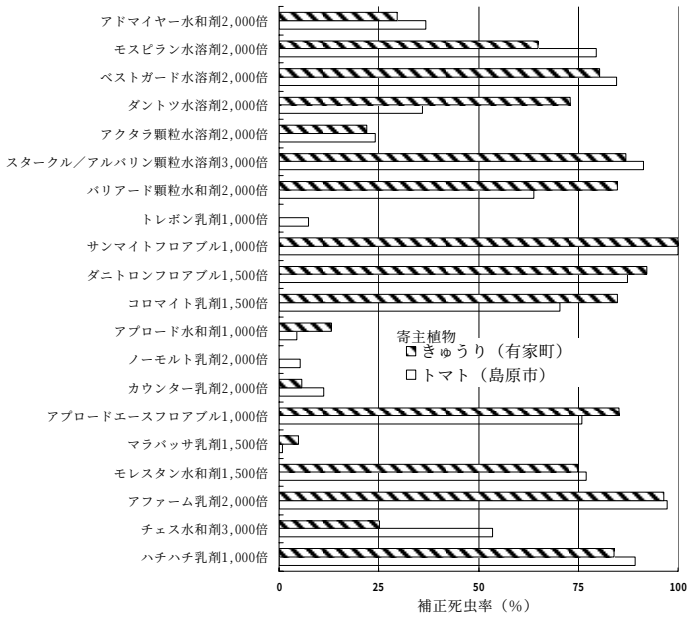
越冬世代成虫の発生が多い状況が続いてきましたが8月上旬以降は終息に向かい（図）、今後は当年世代成虫に入れ替わる時期となります。
現在、当年世代は主にヒノキきゅう果上に生息し、きゅう果が餌として好適な間はきゅう果上にとどまっています。しかし、吸汁が進むと餌として不適になり、ヒノキから離脱し、果樹園へ飛来します。
当年世代成虫の発生量や各地域ごとの果樹園への飛来時期は下記のとおり予測されますので、防除指導の参考にしてください。
 

図 ﾁｬﾊﾞﾈ・ﾂﾔｱｵｶﾒﾑｼの誘殺状況（諫早：黄色ｺｶﾞﾈｺｰﾙ）
※平年値は平成11～17年の平均

1 当年世代成虫の発生量について
(1) 6月下旬に実施した、ヒノキきゅう果着生状況調査（県内14地域、</td></tr>
</table>

<table>
<tr><th>番号</th><th>発表月日</th><th>対象作物
対象病害虫</th><th>情報内容</th></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>
ヒノキビーティング調査地周辺での達観調査）では、平年並の着生量であった。
(2) (社)長崎県医師会が春季に実施しているスギ･ヒノキの花粉飛散数調査の結果、スギの花粉数 1696 個（平年 1387 個）、ヒノキの花粉数415個（平年 400個）であった。なお、花粉数は県内8カ所の平均値である。
(3) 当年世代の発生量は、越冬世代の発生量とは相関がなく、スギ･ヒノキきゅう果の着生量との相関が高い。そのため、当年世代成虫の発生量はほぼ平年並であると予測される。
2 果樹園への飛来時期について
7月27～31日に実施したヒノキきゅう果の口針鞘数調査の結果、県内14地域の予測飛来日は8月12日～9月16日（表）で、県平均は9月7日である。
表 各地域の果樹園への予測飛来日
<table>
<tr><th>地 域 名</th><th>口針鞘数</th><th>予測飛来日</th><th>地 域 名</th><th>口針鞘数</th><th>予測飛来日</th></tr>
<tr><td>長与町岡</td><td>4.0</td><td>9月 4日</td><td>東彼杵町赤木</td><td>2.2</td><td>9月11日</td></tr>
<tr><td>時津町子々川</td><td>1.6</td><td>9月13日</td><td>佐世保市針尾</td><td>2.6</td><td>9月 9日</td></tr>
<tr><td>西彼町小迎</td><td>0.8</td><td>9月16日</td><td>佐世保市宮</td><td>5.1</td><td>9月 1日</td></tr>
<tr><td>西海町木場</td><td>1.4</td><td>9月13日</td><td>瑞穂町伊福</td><td>3.5</td><td>9月10日</td></tr>
<tr><td>多良見町東園</td><td>10.6</td><td>8月12日</td><td>国見町百花台</td><td>5.6</td><td>9月 2日</td></tr>
<tr><td>諫早市長田</td><td>1.9</td><td>9月12日</td><td>有家町新切</td><td>2.8</td><td>9月12日</td></tr>
<tr><td>大村市今村</td><td>7.6</td><td>8月23日</td><td>北有馬町田平</td><td>2.7</td><td>9月13日</td></tr>
</table>
注1 7月 27～31 日に各地域5カ所(1カ所 20 果）を調査した。
注2 1果当たりの口針鞘数が 25 を超えるとカメムシはヒノキきゅう果から離脱する。
注3 予測は福岡県農業総合試験場が作成した予測式を利用した。
3 防除上注意すべき事項
(1) 多良見町、大村市では当年世代成虫の果樹園への飛来は8月に見られると考えられ、越冬世代成虫と当年世代成虫の発生がほぼ連続すると思われるので、今後もしばらく園での発生に注意する。
(2) 他の地域では、8月下旬から9月上旬にかけていったん園での発生は落ち着くと思われるが、9月上旬から中旬にかけて飛来が始まると考えられるので、警戒を怠らないようにする。
(3) 飛来量や飛来時期は同一地域内でも園によって異なる場合があるので、園をこまめに見回り、早期発見･早期防除に努める。
(4) 収穫時期が迫っているので使用期間に注意する。また、今年は5月以降長期間に渡って発生が多く、薬剤の使用回数が多くなっているので、過去の薬剤散布履歴を十分に確認し、使用回数の限度を超えないよう注意する。
(5) 今後の発生状況は予察情報や病害虫防除所ホームページに掲載する予定であるので防除の参考にする。
</td></tr>
<tr><td>第4号</td><td>12月26日</td><td>施設野菜
タバココナジラミ類</td><td>
施設野菜におけるタバココナジラミ類の防除対策について

タバココナジラミ類は生態学的性質が異なる数多くの系統（バイオタイプ）に分かれており、本県では海外から侵入した2系統、バイオタイプB（シルバーリーフコナジラミ）と、バイオタイプQが主に発生しています。両系統とも薬剤感受性が低く、特にバイオタイプQは高度の薬剤抵抗性を持っています。
12 月の巡回調査（トマト、きゅうり）の結果では並～やや多の発生となっていますが、今後の発生に注意して、下記対策を参考に防除指導を行ってください。
</td></tr>
</table>

番号	発表月日	対象作物 対象病害虫	情報内容
			1．耕種的防除および物理的防除 (1)ハウス開口部（サイド、谷部、出入口）への目合い1．0mm以下の防虫ネットの設置による侵入の防止、黄色粘着板等による捕殺を主とした防除を行う。 (2)近紫外線除去フィルムの利用、圃場周辺への光反射フィルム敷設も侵入を防止するので、これらを組み合わせた防除を行う。 (3)苗から本圃への持ち込みを防ぐ。 (4)増殖源となるのでハウス内及び、周辺の除草を行う。 (5)栽培終了後は施設外へ拡散しないように、全ての株を地際から切断した上で施設を密閉し、全ての株が枯れるまで蒸し込む。特にトマト、ミニトマトでは黄化葉巻病の伝染環を断つために徹底して行う。 2．薬剤防除 (1)長崎県総合農林試験場による、県内のきゅうり、トマトから採集したバイオタイプQに対する実用濃度での薬剤感受性検定結果は図（幼虫）、表1（成虫）のとおりである。薬剤感受性には地域や圃場によりバラツキが予想されるので留意する。なお、補正死亡率 80%以上の薬剤は以下のとおりである。 幼虫：ベストガード水溶剤2,000倍、スタークル／アルバリン顆粒水溶剤3,000 倍、サンマイトフロアブル 1,000 倍、ダニトロンフロアブル 1,500倍、アファーム乳剤 2,000 倍、ハチハチ乳剤 1,000 倍 成虫：ベストガード水溶剤 1,000～2,000 倍、スタークル／アルバリン顆粒水溶剤 3,000 倍、バリアード顆粒水和剤 2,000 倍、サンマイトフロアブル 1,000 倍、アファーム乳剤 2,000 倍 (2)多発生後は防除が困難となるので、発生をみたら直ちに防除を行う。特にトマト、ミニトマトは、本虫が黄化葉巻病を媒介するので注意して観察する。 (3)有効薬剤への薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける。 (4)検定に用いた薬剤は、作物によっては登録がないものもあるので、農薬を使用するときはよくラベルを読み、使用基準を遵守する。  図　タバココナジラミ・バイオタイプQ幼虫の薬剤感受性 （長崎県総合農林試験場）

<table>
<tr><th>番号</th><th>発表月日</th><th>対象作物
対象病害虫</th><th>情報内容</th></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>
※2006 年 12 月現在，アファーム乳剤，ダニトロンフロアブル、マラバッサ乳剤はタバココナジラミに適用なし。
※供試虫は 2006 年6月～9月に採集
※検定方法：インゲン葉を用いたリーフディスク法により実施。展着剤（トリトンX-100　0.05ppm）を添加した所定濃度の供試薬剤を，卵後期に薬剤回転散布塔にて散布し，風乾後寒天ゲル上に保持，25℃下で8日後（3齢幼虫期）に生死を判定した。

表1　タバココナジラミ・バイオタイプQ成虫の薬剤感受性
(長崎県総合農林試験場)
<table>
<tr><th rowspan="3">薬剤名</th><th rowspan="3">希釈倍数</th><th colspan="3">採集作物および地点</th></tr>
<tr><th colspan="2">トマト</th><th>きゅうり</th></tr>
<tr><th>島原市</th><th>南島原市
北有馬町</th><th>南島原市
有家町</th></tr>
<tr><td>アドマイヤー水和剤</td><td>2,000</td><td></td><td></td><td>26.2*</td></tr>
<tr><td>モスピラン水溶剤</td><td>2,000</td><td>83.4</td><td>83.3</td><td>51.8</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ベストガード水溶剤</td><td>2,000</td><td></td><td></td><td>89.6</td></tr>
<tr><td>1,000</td><td></td><td>100</td><td></td></tr>
<tr><td>ダントツ水溶剤</td><td>2,000</td><td></td><td></td><td>3.5*</td></tr>
<tr><td>アクタラ顆粒水溶剤</td><td>2,000</td><td></td><td></td><td>14.9*</td></tr>
<tr><td>スタークル／アルバリン顆粒水溶剤</td><td>3,000</td><td>100</td><td></td><td>95.2</td></tr>
<tr><td>バリアード顆粒水和剤</td><td>2,000</td><td>96.8</td><td>100</td><td>87.0</td></tr>
<tr><td>トレボン乳剤</td><td>1,000</td><td></td><td></td><td>5.2*</td></tr>
<tr><td>サンマイトフロアブル</td><td>1,000</td><td></td><td>100</td><td>100</td></tr>
<tr><td>ダニトロンフロアブル</td><td>1,500</td><td></td><td></td><td>7.7*</td></tr>
<tr><td>コロマイト乳剤</td><td>1,500</td><td></td><td>53.8</td><td>17.1*</td></tr>
<tr><td>モレスタン水和剤</td><td>1,500</td><td></td><td></td><td>13.9</td></tr>
<tr><td>アファーム乳剤</td><td>2,000</td><td>97.5</td><td>96.6</td><td>94.5</td></tr>
<tr><td>チェス水和剤</td><td>3,000</td><td></td><td>73.3</td><td>42.8</td></tr>
<tr><td>スピノエース顆粒水和剤</td><td>3,000</td><td>56.4</td><td>25.9*</td><td>30.9*</td></tr>
<tr><td>ハチハチ乳剤</td><td>1,000</td><td>6.1*</td><td></td><td>24.9*</td></tr>
</table>
※数字は補正死虫率（%），太字は補正死虫率 80 以上，＊ は 40 未満。
※2006 年 12 月現在、アファーム乳剤、スピノエース顆粒水和剤、ダニトロンフロアブルはタバココナジラミに適用なし。
※供試虫は 2006 年6月～9月に採集
※検定方法：熊本法（樋口ら，2005）による。キャベツ葉（品種；金系 201 号）を，展着剤（トリトンX-100　0.05ppm）を加用した薬剤に 10 秒間浸漬し，風乾した後，検定容器に挟んで輪ゴムで固定して，タッパーに水差しした。容器側面に空けた穴から成虫 15～20 頭を放飼して，綿棒の先で栓をした。1濃度あたり3～4反復で行い，25℃，16L-8D 条件で5日後に生死を判定した。
</td></tr>
</table>

<table>
<tr><th>番号</th><th>発表月日</th><th>対象作物
対象病害虫</th><th>情報内容</th></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>表2　薬剤感受性検定で、補正死虫率が８０%以上だった薬剤の「平成18 年度病害虫防除基準」への記載状況

<table>
<tr><th>薬　剤　名</th><th>きゅうり</th><th>トマト</th><th>ミニトマト</th><th>メロン</th><th>なす</th></tr>
<tr><td>ベストガード水溶剤</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td></tr>
<tr><td>スタークル／アルバリン顆粒水溶剤</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>□</td><td>○</td></tr>
<tr><td>バリアード顆粒水和剤</td><td>▲</td><td>○</td><td>▲</td><td>△</td><td>□</td></tr>
<tr><td>サンマイトフロアブル</td><td>○</td><td>○</td><td>×</td><td>○</td><td>×</td></tr>
<tr><td>ダニトロンフロアブル</td><td>●</td><td>×</td><td>×</td><td>●</td><td>●</td></tr>
<tr><td>アファーム乳剤</td><td>●</td><td>●</td><td>●</td><td>●</td><td>●</td></tr>
<tr><td>ハチハチ乳剤</td><td>○</td><td>○</td><td>△</td><td>×</td><td>○</td></tr>
</table>
○：記載あり（対象害虫：ﾀﾊﾞｺｺﾅｼﾞﾗﾐ類）
●：記載あり（対象害虫：他の害虫）
△：H19 年度にﾀﾊﾞｺｺﾅｼﾞﾗﾐ類で記載予定、H18 年 12 月現在、ﾀﾊﾞｺｺﾅｼﾞﾗﾐ類に登録あり
▲：H19 年度に他の害虫で記載予定、H18 年 12 月現在、ﾀﾊﾞｺｺﾅｼﾞﾗﾐ類又は他の害虫に登録あり
□：記載なし、H18 年 12 月現在、ﾀﾊﾞｺｺﾅｼﾞﾗﾐ類又は他の害虫に登録あり
×：H18 年 12 月現在、作物登録なし</td></tr>
<tr><td>第5号</td><td>平成１９年
2月１４日</td><td>果樹カメムシ類越冬量調査結果</td><td>果樹カメムシ類の越冬量調査結果について

1月下旬～2月上旬に行った果樹カメムシの越冬量調査の結果は下記のとおりでした。
今後の果樹カメムシ防除の参考にしてください。
発生状況等
平成１９年1月下旬～2月上旬に常緑広葉樹林の落葉中におけるチャバネアオカメムシ成虫の越冬量を県内１８地点で調査した結果、0.1頭／㎡で、平年値0.4頭／㎡に比べ少なく、少発生であった平成１７年並の越冬量であった（図）。
越冬量と4月から8月上旬までの予察灯誘殺量は相関が高く（図）、今後、4月から8月上旬頃までは果樹園へのカメムシの飛来は平年より少ないと予想される。
発生状況の推移等については、今後の予察情報や病害虫防除所ホームページに掲載する予定である。

表　チャバネアオカメムシの越冬量調査結果
調査日：平成 19 年1月 19,23 日,2 月 5 日
<table>
<tr><th>No</th><th>調査地点</th><th>調査面積（㎡）</th><th>採取虫数（頭）</th><th>開方位</th><th>標高(m)</th><th>果樹園からの距離(m)</th><th>樹林地を形成する主要な樹種</th></tr>
<tr><td>1</td><td>多良見町東園</td><td>3</td><td>0</td><td>南</td><td>100</td><td>50(ﾐｶﾝ)</td><td>ｼｲ、カシ</td></tr>
<tr><td>2</td><td>多良見町佐瀬</td><td>3</td><td>0</td><td>南東</td><td>50</td><td>隣接(ﾐｶﾝ)</td><td>ｸﾘ</td></tr>
<tr><td>3</td><td>長与町岡</td><td>3</td><td>0</td><td>南西</td><td>80</td><td>隣接(ﾐｶﾝ)</td><td>ｼｲ、カシ</td></tr>
<tr><td>4</td><td>時津町西時津</td><td>3</td><td>0</td><td>東南</td><td>40</td><td>隣接(ﾐｶﾝ)</td><td>ｼｲ、カシ</td></tr>
<tr><td>5</td><td>琴海形上町大子</td><td>3</td><td>0</td><td>南</td><td>80</td><td>隣接(ﾐｶﾝ)</td><td>カシ</td></tr>
<tr><td>6</td><td>西彼町小迎</td><td>3</td><td>0</td><td>南西</td><td>50</td><td>隣接(ﾐｶﾝ)</td><td>ｼｲ、カシ</td></tr>
<tr><td>7</td><td>西海町丹納</td><td>3</td><td>0</td><td>南西</td><td>80</td><td>隣接(ﾐｶﾝ)</td><td>カシ</td></tr>
<tr><td>8</td><td>諫早市長田</td><td>3</td><td>0</td><td>南西</td><td>180</td><td>隣接(ﾐｶﾝ)</td><td>ｼｲ、カシ</td></tr>
<tr><td>9</td><td>高来町小峰</td><td>3</td><td>0</td><td>南西</td><td>90</td><td>1,000(ﾐｶﾝ)</td><td>ｼｲ、カシ</td></tr>
</table></td></tr>
</table>

番号	発表月日	対象作物 対象病害虫	情報内容

10	大村市今村	3	0	南西	50	隣接(ﾐｶﾝ)	ｼｲ、カシ
11	大村市鬼橋	3	1	南東	50	200(ﾐｶﾝ)	ｼｲ、クリ
12	東彼杵町赤木	3	0	南西	50	隣接(ﾐｶﾝ)	ｼｲ、カシ
13	瑞穂町伊福	3	1	南東	100	隣接(ﾐｶﾝ)	ｼｲ、カシ
14	国見町百花台	3	0	南東	170	100(ﾐｶﾝ)	ｼｲ、カシ、クヌギ
15	北有馬町沢野	3	1	南東	150	1,500(ﾐｶﾝ)	ｼｲ、カシ
16	有家町新切	3	0	南西	200	隣接(ﾐｶﾝ)	ｼｲ、カシ
17	佐世保市宮	3	0	南西	300	1,000(ﾐｶﾝ)	ｼｲ、カシ
18	佐世保市針尾	3	0	南西	70	隣接(ﾐｶﾝ)	ｼｲ、カシ
	合計	54	3				
	1㎡当たり虫数(頭)		0．1				

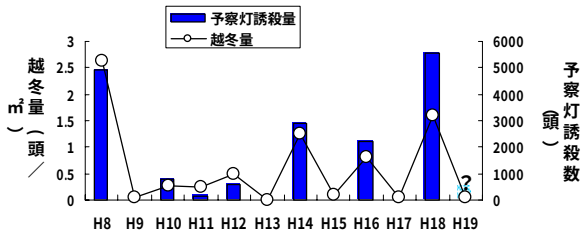


図 ﾁｬﾊﾞﾈｱｵｶﾒﾑｼの越冬量と予察灯誘殺量
(4月～8月上旬：諫早青色蛍光灯)